

第 37 回大阪大学野田村サテライトセミナー

東日本大震災からの地域復興を考える

2016 年 3 月 11 日、野田村生涯学習センターにて「第 37 回大阪大学野田村サテライトセミナー」を開催しました。今回のセミナーは、弘前大学地域未来創生センターとの共催です。

震災直後から野田村を拠点に支援・交流活動を実施してきた、弘前大学、八戸高専、京都大学、大阪大学、認定 NPO 法人日本災害救援ボランティアネットワーク（NVNAD）等で構成される「チーム北リアス」の活動を振り返り、今後の活動について模索する場となりました。

第 1 部は、チーム北リアスの主メンバーである 5 団体と野田村サテライトの活動報告を行いました。第 2 部は、野田村長小田祐士氏と大阪大学大学院教授渥美公秀氏をパネリストに迎え、チーム北リアス共同代表・弘前大学の李永俊教授が座長となり、『チーム北リアス』のこれからの活動について」と題し座談会を行いました。

野田村の方々をはじめ、チームオール弘前、八戸高専、関西学院大学、NVNAD の多数のボランティアの参加があり、参加者総数 84 名となりました。また、今回も遠隔教育システムを使用して、大阪大学吹田キャンパスをつなぎ、同時中継でセミナーを行い、大阪大学の教職員や学生も参加することができました。

第 1 部 活動報告

第 1 報告は、チームオール弘前の活動について弘前大学李永俊教授がお話しされました。チームオール弘前の活動の特徴は、毎月、ボランティア定期便をだし、市民ボランティアと弘前大学ボランティアセンターと一緒に活動したことであると報告されました。震災直後のガレキの片付けに始まり、仮設住宅での交流会など走りながら考えて様々な活動を展開されてきたそうです。また、大学としては野田三巻本を出版できたと報告されました。今後の活動方針としては、支援・交流活動の「支援」をとり、交流活動を継続的に行っていききたいと述べられました。

第 2 報告は、八戸チームの活動について八戸高専の河村信治教授が報告されました。八戸チームの活動は不定期、臨機応援であることが特徴で、農地整備や山車の制作のお手伝いなどきめ細やかな支援を実施されています。また、東京の大学と連携して、大学生が野田村のまちづくりについて考え、提案するワークショップを毎年開催されています。何ができた（つながった）のか、何ができなかった（つながっていない）のか考え、継続的に今後も活動を行うと報告されました。

第 3 報告は、主に八戸のボランティアで構成される写真班と共に活動してきた大阪大学大学院の宮前良平さんから報告いただきました。写真班は津波で流され被災した写真約 8 万枚を回収、洗浄、整理し、残り約 2 万枚になるまで返却活動を行ってきました。単に写真返却だけを目的とするのではなく、写真を見てお茶を飲みながら思い出話をしあう場所を作

っていくというスタンスで「写真返却お茶会」を月1回継続的に開催しています。「最後の1枚まで」をスローガンに今後も月1回のお茶会を継続していくとお話しされました。

第4報告からは関西チームの活動です。まずは京都大学の活動について、京都大学永田素彦准教授がお話しされました。京都大学は少人数で他の団体と共同で活動を展開されてきました。また、卒業研究等で多くの学生が野田村でお世話になり、様々な視点から論文を書いているそうです。中には「河合書道教室」のように被災者も非被災者も参加しやすい新しい形の交流活動も生まれています。これまでの経験を活かし、今後も活動を継続していくと報告されました。

第5報告は、認定NPO法人日本災害救援ボランティアネットワークの寺本弘伸常任理事と関西学院大学関嘉寛教授より、関西からのボランティアバス等の取り組みについて報告されました。関西からのボランティアバスは、2011年3月29日の第1便から第26便まで野田村に通っています。被災者の1人ひとりに向かい、寄り添い、「点」の活動ではなく「線」の活動にという想いで行動されてきたそうです。被災家庭の後片付け、側溝の泥出しにはじまり、仮設住宅でのお茶会、足湯、野田祭りの参加など、時々に応じた活動を展開されています。今後も活動を続けたいと締めくくられました。

最後の報告は、野田村にサテライトキャンパスを設置している大阪大学石塚裕子特任助教からのお話です。大阪大学野田村サテライトは、被災地のコミュニティ復興に寄与する「教育」「研究」「実践活動」の拠点として2013年3月に開設されました。教育面では毎年8月に実施している集中講義のフィールドワーク、実践活動では、地元有志の方と協働でコミュニティラジオの開局に向けた活動を展開しています。また、本サテライトセミナーは毎月11日に開催して今回で丸3年、37回実施したことになり、2016年度より運営方法をバージョンアップする予定と報告されました。

いずれの報告も今後活動を継続していく方針を掲げ、さらに野田村の方々と共に復興をめざしていく決意が語られました。



第2部 座談会『チーム北リアス』のこれからの活動について

小田祐士氏・渥美公秀氏・李永俊氏

第2部は弘前大学李永俊教授を座長に座談会形式で行われました。最初に震災から5年を経て今感じていることについて語っていただきました。

小田村長は、大津波からようやく落ち着き、ハード面を中心に少しずつ復旧してきたと感じていると話されました。一方、津波で家を流された人だけでなく、物理的な被害を受けていない人も被災者であると、日に日に増して感じているそうです。物理的な被害を受けなかった村民の「被災しなくて、ごめんね。」という気持ちの回復が課題であるとお話しされました。まだまだ復旧は終わっていないけれど、一步一步進んでいけると、小田村長は実感されているそうです。

また、チーム北リアスに対しては、寄り添うというより、何気に傍に居て心地よい安心感がある存在とお話されました。チーム北リアスのマークをつけた車が村内を走っている様子が自然体であるともお話しされました。

一方、チーム北リアスという、ゆるやかなボランティアのネットワークを形作り、野田村で5年間活動されてきた大阪大学渥美公秀教授は、全国の皆さんからご寄付を頂戴し、村民の方々に温かく迎えていただき、~~役場~~役場の方々から様々なご協力を賜り、そして、貫牛利一さんというアドバイザーに支えていただいて、チーム北リアスは活動してこれたと感じ、みなさまに感謝しているとお話しされました。そして、災害ボランティアの専門家として、災害ボランティアは、緊急時には何をやるべきかわかりやすく、チーム北リアスもしっかり活動できたと感じているが、これからの復興期における活動は、主語が村民となる成熟した活動が求められ、活動の見直しも必要であると述べられました。

座長の李先生は、震災直後の被災した住宅の後片付けを振り返り、あまりの被害の状況に被災された方が途方にくれていたところ、木片ひとつひとつを手作業で片付けるボランティアが活動しているうちに、「もう1人でできるから」と村民の方の力が蘇ってきたお話しをされ、人の手の大切さを語られました。

次に、これからについて、小田村長は村の復興、生活を守るにはハード整備を抜きには考えられない、ハード整備が終わらないとスターとできないことを強調されました。ただし、現在、整備している堤防が完成形ではなく、何十年後、百年後にまた来るであろう災害に備え、今回の経験を継承し、未来に向けて考え続けることが大切であるとお話しされました。

野田村はみんなが顔と名前を知っている小さな村であるが、高台移転などにともない“となりに住んでいる人が変わる”ということは、コミュニティを創りなおすということになり今後の課題であるとも述べられました。

渥美教授は、村民のみなさんが何をしたいこうとするのか、20年、30年を見据えて野

田村の人が中心の活動を協働していきたいと話されました。例えば震災の記録と記憶をどのように残していくのか、またそれをどのように発信していくのか、そろそろ考えていく時期を迎えている。国や県の規模の震災記念館が野田村に建つことはない中で、野田村で震災の経験を伝承していく博物館のようなものは、野田村の人がつくっていかないとけないと思うと語られました。また、村民有志が取り組んでいる「のだむラジヲ」は、単なるラジオの放送ではなく、村民のアーカイブにもなる可能性を秘めているとお話しされました。

最後に小田村長から、チーム北リアスへのメッセージとして、「これからも何かしら傍にいる、友人、知り合いのような末永いお付き合いをお願いしたい。」とお話いただきました。

